立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター
センター通信
第12号
2018.3.30

博多人形がつなぐ夢野久作と江戸川乱歩

川崎賢子

全集編纂作業は命を縮めるので二度とやるまいと「定本久生十蘭全集」（国書刊行会）で決意したというのに、また引き受けてしまった「定本夢野久作全集」（国書刊行会）。長篇「ドグラ・マグラ」をおさめる第四巻の編集に入って以来、その余のことは失念、失態続きで、まわりの方に迷惑をかけてばかりである。

「ドグラ・マグラ」の由来について本文中には「維新前後までは切支丹伴天連の使う幻魔術のことをいった長崎地方の方言だそうで、只今では単に手品とか、トリックとかいう意味にしか使われていない一種の廃語同様の言葉だそうです。語源、系統なんぞは、まだ判明いたしませぬが、強いて訳しますれば今の幻魔術もしくは『堂廻目眩』『戸惑面喰』という字を当てて、おなじように『ドグラ・マグラ』と読ませてもよろしい」（引用者注・筑摩書房版『ドグラ・マグラ』一九九二年を参照し現代仮名遣い表記に改めた）と、もっともらしく説明されている。

近松門左衛門「吉野都女楠」（宝永七［一七一〇］年、大坂竹本座）に、「阿弥陀仏まで質屋へとばし手ぐらまぐらに調へ」の一節があり、これを「ドグラ・マグラ」の語源という説を立てた人があるそうで、たしかに夢野久作の実父杉山茂丸（一八六四－一九三五）は、其日庵と号して浄瑠璃を語り、校訂解釈し、時に書き換えを試みるという側面もあったので、夢野も相応のたしなみはあったかにおもわれるが、「ドグラ・マグラ」は構想十年、執筆十年、二十年がかりの大作であり、なかなかどうして「手ぐらまぐら」（その場しのぎに事をすること。また、そのさま）の技ではない。むしろ言葉の迷宮に「とぐろ」まく狂気の世界である。

「幻魔作用（ドグラ・マグラ）の印象をその一番冒頭になっている真夜中の、タッタ一つの時計の音から初めまして、次から次へと逐いかけて行きますと、いつの間にかまた、一番最初に聞いた真夜中のタッタ一つの時計の音の記憶に立ち帰って参りますので……それは、ちょうど真に迫った地獄のパノラマ絵を、一方から一方へ見まわしていくように、おんなじ恐ろしさや気味悪さを、同じ順序で思い出しつつ、いつまでもいつまでも繰返して行くばかり……逃れ出す隙間がどこにも見当たりませぬ」とみずからについて語る厄介なテクストだ。

畢生の大作「ドグラ・マグラ」の上梓は昭和十（一九三五）年一月、その二十六日に内幸町の大阪ビル地下のレインボー・グリルで五十余名を迎えて発刊記念会が催された。夢野久作はその日の日記に「会ふて嬉しかりし人乱歩、井村（引用者注・竹市、後の日本製鐵取締役か）、土岐（引用者注・雄三）、森下（引用者注・雨村）、浜尾（引用者注・四郎）、延原（引用者注・謙）、青柳（引用者注・喜兵衛）」と記し、「江戸川氏と将棋をさす約束す」と結んでいる。

将棋の約束は二十八日夜に果たされた。大下宇陀児と乱歩邸を訪い、「芸術談」その後将棋で「乱歩二勝余一勝」の結果であった。

多くの探偵小説作家がそうであったように、夢野久作もまた江戸川乱歩には畏敬の念に似たものを抱いていたようだ。夢野は福岡県の香椎在住であっ

—目　次—

博多人形がつなぐ夢野久作と江戸川乱歩　川崎賢子
『孤島の鬼』のフランス語出版にあたって　スロコンブ都
〈恩送り〉の奇跡／軌跡、時間と記憶のアレゴリー
—福島県立いわき総合高等学校総合学科第15期生
アトリエ公演『失われた時を与えて』　後藤隆基
〈資料紹介〉
乱歩旧蔵・新規購入本『浮世花鳥風月』『好色堪忍記』について　丹羽みさと
〈編集後記〉

たから滅多に会う機会はもてなかったものの、文通はあり、乱歩に人形を送っている。

「井上人形店に立寄り、旧式博多人形の裏に、江戸川乱歩様、１９２９、夢野久作とかく」（「夢野久作日記」昭和四年一月十八日）、「乱歩氏に人形を入れて送る箱製造中」（「日記」同年一月二十四日）と、念入りな贈物であった。乱歩も夢野も、いずれもただならぬ人形愛の作家たちであり、まことに似つかわしいやりとりで、贈るひとの志、贈られたひとのよろこびがしのばれる。

夢野が人形を選んだ「井上人形店」とは、博多人形を世界的なものにした井上清助（一八六七－一九二二）の工房であったろうか。井上清助は博多人形の品質の向上、近代化と世界進出に尽くして博多人形界を牽引する存在となり、その工房には名人とうたわれた小嶋与一（一八八六－一九七〇）らも籍を置いた。

井上は人形師として白水六三郎らとともに「温古会」を興して福岡における南画の革新者として知られる上田鉄耕（一八四九－一九一四）や洋画家の矢田一嘯（一八五九－一九一三）の指導を仰いだ。彼らの功績は博多人形を美術としてよりすぐれたものにしたことだけではない。なかでも井上は、東京の細工師に学んで人形制作の工程を分業制にするなど合理的な発想を持ち、何よりも、アイディアマンであった。川上音二郎一座の演目に合わせた芝居人形や、日清戦争時の池燈籠の戦場模型など、全国各地の博覧会や共進会、さらには中国上海の日清貿易陳列所への出品など、果敢な挑戦を繰り返した。福岡・博多の地に生を受けた、海外雄飛型の人物の一人だ。井上清助らが師事した矢田一嘯は、洋画家とはいいながら、活人画やパノラマに才能を発揮した人物で、虎ノ門の工科大学校（現・東京大学工学部）における日本初の活人画の背景（一八八〇年）、第三回内国勧業博覧会における日本初のパノラマ館「上野パノラマ館」における「明治元年奥州白川（ママ）大戦争図」（一八九〇年）、熊本に設立された九州パノラマ館「西南戦争」（一八九四年）で名を挙げていた。福岡に移り住むと幾多の元寇図を描いた。博覧会、パノラマという新しい視覚装置への関心が、井上と矢田をいっそう強く結びつけたのかもしれない。博多人形は第三回内国勧業博覧会にも出品されている。矢田は温古会で、造型や着色などについて洋画の依拠する解剖学を紹介したとも伝えられる。

解剖学といった、人体への自然科学的知、医学的知のまなざしは、井上清助の博多人形工房の仕事をおおいに触発した。彼は福岡出身の政治家金子堅太郎（一八五三－一九四二）の紹介で人類学者の坪井正五郎（一八六三－一九一三）に師事し、人類学者松村瞭（一八八〇－一九三六）、国文学者関根正直（一八六〇－一九三二）らの監修を得て、解剖学的知見と民族学的知見を併せ持つ「世界人類風俗人形」シリーズや「日本歴代服飾模型」シリーズ、「世界風俗陶板」シリーズ、「日本帝国人種模型」シリーズを次々に発表した。たとえば「世界人類風俗人形」には、「日本の男性」「日本の女性」「琉球の男性」「琉球の女性」「アイヌの男性」「アイヌの女性」「朝鮮の男性」「朝鮮の女性」「中国の男性」「中国の女性」「台湾の男性」「台湾の女性」などが列挙され、この時代の解剖学や人類学のまなざしが帝国主義的な世界像とともにあったこと、博覧会は帝国列強がその植民地世界の文物を差別化し陳列する空間であったことを想い起こさせる。「世界人類風俗人形」は一九〇〇年のパリ万国博覧会に出品され、現在は東京大学総合研究博物館に収蔵されている。もとより万国博覧会には「人種博覧会」として「原住民」を展示するというグロテスクな流行があり、生身の人間を展示する代わりに「種族容貌の異同を示す」人形を用いて「歴史や民族の差異をわからせる」という展示方法は、より洗練された趣向とみなされたのかもしれない。

坪井正五郎らの解説書付きの「世界人類風俗人形」や髪型、服飾などの人形標本は、「井上式地歴標本」として全国の学校で教材に採用された。これ

を通して博多人形が全国に知られるようになったともいわれる。

夢野久作日記にわざわざ「旧式博多人形」と断っているのは「井上式」の標本人形とは違うという区別かと推測される。しかしながら旧江戸川乱歩邸が所蔵する人形は、歯並びなど過度にリアルなところがある。履物の底には「夢野久作」と彫られている。

乱歩からは二月二十一日付、平井太郎名で人形の礼状が届けられている。戸塚時代には玄関に飾られていたと聞く。

川崎　賢子